

しんで行っているけれども、親としては偏差値を気にするんだそうですよ。そういう言い方をされて少し淋しい思いをしました。

現在の芦屋高校

——多様化した現代の高校生

司会 高木先生、今の生徒達は、芦高に対してどんな気持ちを持っているのでしょうか。先生の感じておられることをお話し下さい。

高木 そうですね……私は、大学を卒業してすぐ、昭和46年4月から芦高にお世話になってるんですが、私を県芦へ来ないかとお誘い下さったのは、先輩の伊東^{たけし}先生だったんです。46年3月末頃でしたか、私の家においでになって、「県芦に来ないか。だけでも、県芦はちょっと大変な事が起こるかも分からないから、覚悟しとけよ」と言われました。と言うのは、46年の前年ですか、12月だったと思いますが、同和問題で、当時の解放同盟からの公開質問状に対して、県芦としての姿勢を問われておりました。それが、今になって考えれば、伊東先生の話の内実ではなかったかなと思うんです。

私は当時、同和問題は何かのかということが、も一つ勉強不足でよく解らなかつたのですが、とにかく連日夜遅くまで会議がありまして、今でも覚えているんですが、当時の後藤隆一教頭先生が、お家は垂水だったんです。で、私も住まいが垂水区舞子にありまして、よくタクシーに同乗させて頂きました。タクシーに乗るのが、ほとんど夜の11時過ぎでした。



小西先生

藤原真先生

高木正先生

芦高生気質

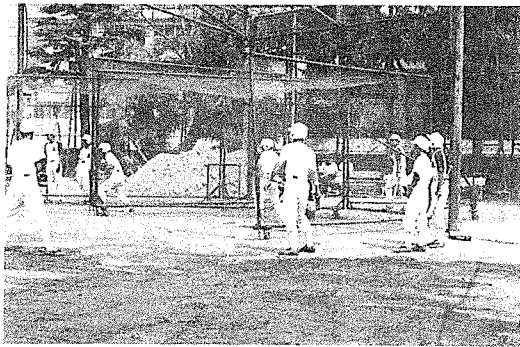
曾谷先生のお話に関連してですけど、私もその一年後に30期生の担任を初めてさせて頂いて、のち9年間、連続して学級担任をいたしました。進学で進む学校を結果的に見ますと、30期生、33期生、36期生と、次第にやや進路先が変わってきたというのは事実で、担任として認識をしっかり持っておかないといけないなと思いました。例えば、私が初めて学級担任をしました30期生などは、クラスでトップの子は京都大学へ現役で入り後に京都大学の大学院へ行って、その後、イタリアの国立のミラノ大学でしたか、文部省か外務省の給付生ということで行き、現在は京都の橘女子大学の助教授をしております。こういう生徒などは、非常に芦高生らしい生徒だと思うんです。と言いますのは、勉強はそれ程やるような雰囲気は無いんですけども、余裕がありながら実は非常に力を持っていると。——ちょっと変な話ですけど、私、当時独身でしたもんですから、(笑い)修学旅行や遠足へ行きますと、彼女は必ず、手作りのおやつを、こっそり私に(笑い)「先生、これ手作りです、どうぞ」と言って持って来てくれたりします。そういうふうには芦高生というのは、今でもそういう伝統は残っていると思うんですが、ガリ勉じゃなくて、何かこう、ゆとりを持ちながら、しかも、都会的な洗練されたものを持っているなあと。

曾谷 学校教育を進学率とか偏差値だけで評価するのは抵抗を感じますけれども、今の方はどうもそのような傾向がございますね。それで、先程から、先生のお話にありましたような学校らしい特徴・良さをもっと強調していただいたら……

クラブ活動

高木 そうですねえ。必修クラブが出来るまでの本校のクラブ活動の参加率というのは、勿論非常に高かったのですが、あの制度が定着してからは、今では1年生は全員どこかのクラブに入ることになっており、さらに参加率が高くなりました。外部から来る方々が、よくおっしゃるのですが、「芦高は非常にクラブ活動が盛んだ」と。盛んだと言うのは、スポーツの面で言いますと、対外試合、ある

いは文化部の面で言いますと、コンクール系の発表の場を持つクラブの成績を指している部分もありますけれども、日常の活動場面をご覧になりまして、「教師はサイドからサポートしているような形だけで、前面に出ていない。だけど、きちっとサポートしている」と言われる。教師と生徒との関係が基礎の上にたった、そういう日頃の活動の場面をご覧になって、「非常に活発だな」と。今の芦屋高校が昔と共通しているところは、やはり、部活動・クラブ活動が、子供達の3年間の中の一方の柱の中心になっているという点じゃないかなと思うんですね。



クラブ活動練習風景

答辞問題

奥田 ちょっと個人的なことになるので恐縮なんですけどね、例の答辞問題がありますね。あれは、高校の予備校化反対という、全国の高校生の代表のような立場で、それを前面に立てて訴えたわけなんです。ところが、場所が場所、しかも卒業式でやったというんで、マスコミが一番ジャーナリスティックに喜んで、そのために随分たくさんの週刊紙や新聞社が取材に来ました。学校長も教頭さんも、ノー・コメントでしたが——私は、その言い分や立場もある面では理解は持っていたんですが、何と言っても、芦屋高校でそんな行動をとることは無いではないかというふうに思っていたんですけど——そういうインタビューをする時は、いつも、3時に来て下さいと言いました。3時に来てもらって、最初の20分くらいは応接室で話をして、3時半頃から5時頃まで校内を連れて歩くんです。それで、「ご感想は？」と聞くと、「何でこの学校で、あんなことが起こったんですか」と、こうなるんです。「これほどクラ

ブの盛んな学校でああいうことになるのは、どこに原因があるんですか」と新聞社が聞くわけです。僕はその時に、「そこから先は、皆さんがご自由に分析なさったらどうですか。まさにジャーナリストとしての腕の発揮するところと違いますか」と言って別れたんですけど……とにかくね、39年・40年、ああいうことがあっても、クラブ活動は生き生きしていましたね。

もう一つ、クラブ活動で、惜しいと言うのは語弊があるんですが、定時制との併用という問題が出たでしょう。両方の学校がうまくやっている例も無きにしてもあらずですけど、芦屋高校の生徒というのは、授業が終わってのんびりと4時頃まで雑談して、本式にやり出すのが4時半頃からという現状だから、5時になってすぐ、定時制との申し合わせで、活動を終えて下校しろと言うのはねえ、とてもじゃないけど、クラブが弱くなる一因になり易いですね。これは、定時制教育側から言えば、当然そうすべきなんだろうが、しかし、そのような物理的な難しい問題もあるんです。

よく生徒に、こんなふうに言ってきました。「一番楽な集団主義、強制的なやり方を、この芦屋高校はしていない。“自由”ということをやっているんだから、それだけ先生も生徒もしんどいんだよ」と。その気持ちが解らんとなかなかうまいこといかんというので、こっちは随分——思い出すと、そんなことばかりですわ。やっこの時代になって、世の中が随分自由というものが分かってきたような感じも——今、行政の方は、また逆になっているようですが——世間とか親とか生徒などには、以前よりは、理解されるようになってきたと思われるのです。

今、高木先生がおっしゃったように、クラブ活動というのは、よそから見たらやっぱり盛んだと思いますね。

壺谷 芦高を去りましてから、そのあと続けて、長男、次男、娘と、三人お世話になりました。37年の後も、約10年ぐらいいは、そういう子供達の目を通して、芦高に強い関心を持っていったわけですが、ちょうど今、次男の長女が精道中学一年で、「しっ

かり芦高に入らなあかんぞ」とけしかけているんです。

ぜひ、お願いしたいと思います。(笑い)

高木 市内で、県芦を目指すための塾があるらしいですね。

奥田 あります。やはり、時代の影響が、塾の繁栄につながっていますね。結局、それは一つは、先生方が研究会等に追い回され多忙で、疲れも出て来る、明るく日の授業の準備もついつい充分出来ないということもあるし、それから他に、教育の観点からランクをつけることは学校ではなるべくしたくない、ところが入学試験というものがあって、私立校に入るにはどうしても成績をあげないといけない、そうなる塾へ行って力をつけなさいと、そういう悪循環が、社会的な要因の一つとして確かにあると思う。

同和問題が本校に影響を与えた中で一番ひどい場合は、入学試験の決定があっても、県の教育委員会の進路課の人達がたくさん押しかけて来て、校長からの報告内容(合否決定)をもう一遍再考した上で報告しろと言って来られたことがあった。それで僕は、その時も、(思ったことしか言わん人間ですから)「入ってから、教育するのは誰ですか。我々だ。」と言った。

発端は、後藤校長の時でしたが、そのあと、野崎校長、市橋校長、宮崎校長と、それぞれの校長さんがあの難しい時期を支えて下さり、そして教頭さんでは、後藤隆一教頭が一番苦勞なさり、その後中村政一教頭も苦勞なさった。同和主事の村上治水先生を中心として、全職員が一生懸命なさったから、一応なんとか収まりました。先生方は大変でしたよ。それぞれの担任の先生がね。個人指導など、随分されていました。

服装の自由化

司会 時代的には、逆であるかも分かりませんが、40年代半ばぐらいでしょうか、学園の自由化という問題がありました。芦高では、服装の自由化、その後ですかね、高校教育の正常化というんですか、摂丹模試が無くなったり、補習授業が廃止されたりしましたが、その辺の所をお聞かせ願えれば……

奥田 “生徒が自由化を求めて”ということについては、大学紛争の影響で、一部の新左翼的な思想に共鳴した生徒が、随分学校側へ押し寄せて来ました。けれど、私が先程から言う開校10年くらいに出来た一つの校風というものが支えになって、僕らも二つ返事に、「君ら、自由化と言うが、芦高は昔からこういうふうな自由な学校だ」と言ったら、「違う!」「それじゃ、君らの自治会規約見てごらん」そういうふうに関答して……まあ、彼らからすれば、ごまかされたと思うか分かりませんが、実際そうなんです。他の学校のように、深刻な理由というものは有り得ない学校だったはずなんです。ただけどやっぱり、青年のことですから、時代の大きな思想の流れの中で純粋にそれらと連帯して行こうという気持ちは、あったと思いますよ。けれど、学校相手に、規約改正を唱えて、制服をどう言うけど、そんなことはもう昭和25年くらいに済んだことです。服装はその後そんなに乱れてないし、かえて今の方が、女子など、服装いいんじゃないか。

高木 そうですね。ちょうど40年代の終わり頃でしたかね、Gパンがはやった頃には、教師と生徒の間で結構服装の問題を議論したことがありました。芦高でも生徒の中にGパンが増えつつありまして、先生方、特に生徒指導関係の先生方には、それを否定するという考え方が大分多かった。今でもよく覚えているんですが、あのGパンは、アメリカでは農作業する時に着る服だということを、当時、生徒課の先生がおっしゃってましてね。

曾谷 生徒は、今、Gパンはいて来ませんか?

高木 今はあんまり……、多いのは、女子は紺の髷スカートで上がいろんなTシャツとかブラウス、男子は黒ズボンが圧倒的に多いです。

で、不思議なことに、標準服は勿論あるんですが、クラブの連中とか、或いは、卒業記念アルバム写真を撮る時は、必ずといって、所謂標準服をですねえ、(笑い)——と言うことは、吉田校長がよくおっしゃるんですけど、「芦高生は節度を心得ておる」と。所謂、T・P・Oを心得ているというんですかねえ、儀式の時は儀式にふさわしいと言いますか——それでも、何年か前の卒業式の時貸衣装の羽織袴を着て

来て髯髻を買ったことがありましたですけどね。

奥田 あれは、甲陽高校で毎年あるものだから、一遍俺もしてみたいというんでやったのでしょうか。

曾谷 大学の入試で、面接を致しますが、その時に芦高の生徒はおしゃれな洋服を着て来まして、すぐに分かりますね。

奥田 体育祭のデコレーションでも、かなり平均したら点数いいですねえ。美的なセンスというか、ファッション感覚というか、センスが非常にいい。



体育祭・トトロのデコレーションを背景にユニホーム姿でもってのほかだと言われる人がありましてね、難しいです。

津本 40年代中頃の学校の民主化の問題は、一般的な時代の流れがあって、この学校で何かやる時にはそれに飛び付いて、やろうとした。するとやはり、完全に自由な服装などというものはあり得ないから……ところが僕らの感覚から言えば、そんなこと今更言う程のことではないではないか、と。だから、外の世界から見たら紛争があったんやないかと言うけど、僕らの感覚から言うと、建て前は建て前としてわりあい要領よくやってきたわけで、それを外からああいう風に騒ぎ立てているという感じがあった。(答辞問題で)内容が、この学校のことを言ってるのかどうか分からんけど、当たっていることもある。例えば、学校の組織なり職員の組織についての批判は、思い当たるようなこともある。一つの組織全体の中だったら、何人が該当する者が居って当たり前でしょう。急に変わるわけにもいかんし。だから、わりあい日常的な流れの中で、ああいう批判が

曾谷 ところがある私学の高校に依りますとね、歩き方から話し方までかっちり面接指導がしてある所があるんですね。おしゃれな服装をして面接に来ると、大学に古くからおいでになる方は、「そんなのは

ばーっと出て来たなという感じがして、僕自身は、まあ本質的にはそう変わらないなという感じで、受け取ったけどね。

曾谷 私が、初めてこちらに参りました時には、共学の経験は初めてだったんですよ、芦屋高校ですね。戦前の女学校の時代からずっと制服に慣れ親しんでおりますから、制服の方が良いのでは一と思ったんです。空谷先生あたりは、もっぱら「反対!」とおっしゃいましたね、戦後の教育の激動期でもありましたけれども、私は動揺しました。自分自身をまず、切り換ええないといけませんからね。

福山 来られる先生、先生がね、「この学校は、一体何のきまりがあるんだ」と、よく言っておられた。一番驚かれたのは、記念祭の一週間制で、「こんな馬鹿げたこと、何でやるんだ」と、言っておられる方が多かったですね。

曾谷 また、漫才してドンチャンしますからねえ(笑い)

福山 だけど5回生の岸本君などは、全国を渡り歩いたわけでしょう。つまり一つ一つに意味があったと思う。

曾谷 御影高校から来ました女生徒も、制服はあったはずですよ。それが、こちらに参りましたら私服に……。だから結局、空谷先生が居られたその頃に、今日の芦屋高校の基礎というものが既に来上がっていたと思いますね。

奥田 いい面もいまだに続いているし、悪い面もみんなその時に出来た。(笑い)

今の消防署の所に校舎があって、昼休み時間や放課後に家へ帰る時、今43号線近くの公園になっている辺りまで出て、好き放題やっているんですな。何と、元気な学校やなと思いました。まあ、無理もないのですが。若い血気盛りの青年が、校舎も無い、運動場も無いんだから。そういう面から見れば理解はできるけど、一市民として見るとね。まあ、戦後の中学校と云ったら、こんなかな、と思っていましたが、それがまた、そこへ勤めたでしょ。さあ、勤めてみたら、中西先生のように腕節のいい人はいざ知らず、我々などは先生と云っていないような生徒もいましたね。

とにかく、いいといえばいい、難儀といえば難儀なのはその頃あってね、それがずっと一部にありますね。だからやっぱり校風というのは、最初の10年に出てきていると思います。

曾谷 私も、どうもそんな気がします。

それとね、私が県に入りました時に、最初に芦屋高校の名前が出たのは、何だと思われませんか。普通高等学校では、きちっと掃除をしろとか言って指導しますよね。ところが、芦高は学校が汚いと、そう言われてましたね。

奥田 今も南館なんかすごいですわ。教師の指導などなくても、自然にきれいにしようという雰囲気、本当に自由な学校なら出来るはずなんですが、50年近く経ってて、依然、それが直らないというのは、やはり自由の難しさだと思う。地域社会と同じですわ。

個性化の時代と芦高の教育

司会 随分貴重なお話ばかりお聞かせ下さいましたが、この10年は多様化の時代とでも言うんでしょうか、その中で例えば、そういう問題を含めて、教務の方から見て、小西先生、この10年の流れとしてはどんな具合でしょうか。

小西 私は、諸先生方の昭和20年代から30年代の校風を創られた時期、つまり「五十年史」で言えば、草創期の先生方に比べて、50年代に着任しましたので、既に創設から34、5年経って成熟した状態でありまして、受け止め方がだいぶ違いました。だいたい、この10年間くらいに来たのが、本校の職員の7割ですが、私の場合、一年目はカルチャーショックを受けまして、生徒の前でどのようなことを言っているのか、戸惑いながら、常に先輩職員の動きを見て、10年以上勤務している人の言動から、「ああ、これは注意しなくていいんじゃないか」と判断して、自分の生徒に対処していく、というふうな状態でした。

例えば、制服の問題などがいい例です。先程の話を伺っていると、昔からそういう面が芦高にはあったようですが、今、校内では、イヤリングをして来る生徒が居りまして、(笑い) 実は、言いにくいですけど、イヤリングを職員の中でしておられる

方も、時代の流れで、皆無じゃないんですね。先生に許されて生徒には許されないというのは、立場の違いという言い方をしながらも、なかなか対応の仕方が難しいところです。

先程、「時代の先取りをする校風」ということをおっしゃっていましたが、私としましては、昭和20年代から30年代初めに高校時代を送った者ですが、本校は、「革新的保守性」というんでしょうか、あの20年代に“先取り”がされて、それが現在まで保持されており、保守性のイメージもありますね。

着任当初の入学式の時に、「自由の意味」ということを話されるんですね。今、学校現場で「自由」などという言葉が、公式の場所では、なかなか話せないんです。「個性化」とか「規律」とかいう言葉はありますけれども、「自由」という言葉が、校長からとか、或いは職員の方から出ることはないんです。

それから次に、新任職員には、「十五年史」・「二十年史」・「三十年史」と、年史を先輩の方がチラッと出されるんです。「理想的学園像」とか、或いは「新生日本」とかいう言葉がありまして、こういう言葉は昭和20年代の私達の高校時代に言われていたのに、30年代後半、教師として教育現場に出ましたところ、そういう雰囲気は殆んど学校にありませんでした。ちょうど世間の全体像と同じように。

現在、生徒が没個人的になって来ており、学校も同様です。だから、教育課程でも、“進路・適性による教育、多様化あるいは学校の特色化”が盛んに言われ、そして、校則の見直しが論議されている。考えてみれば、これは全て昭和20年代の本校の校風を培っていく中で、言われた内容じゃないかと思えます。それが、外の世界では殆んど消えてしまっているのに、本校では残っている。

逆に言えば、校長が転勤して来られました時に、「本校は何てやりにくい学校だろう。真綿で首を絞めるような、(笑い) 言葉は非常に丁寧であるけれども、校長の方針よりも、この学校の伝統というものを、職員ががっちり握っている」ということを言われる。

私ども、非常に微力ながら、そのように35年培わ

れてきたものをどういふふうに継承していけばいいのかということが、この10年間、とりわけ、自分自身が歳を取りだした5年ぐらい前から気になりだしているところでもあります。

ところで、生徒の現状としては、次のようなことが言えるかと思います。昭和40年代前後のベビーブームで、本校の定員が非常に大きくなった。その時の生徒達の子供が、ちょうど今、高校生の時期になりました。平成元年度の本校の生徒定員数が1410人1クラス47人で30クラスです。昭和40年代に次いで二番目に定数の多いのが今年になっています。校内の雰囲気、(社会全体の雰囲気とも重なりますが) ちょうど、37、8年頃の雰囲気にもどっているんじゃないかと感じます。ちょうどあの時は高度経済成長期で、授業もむらのないようにというので、理科・社会は、殆んどが必修という時期でありました。現在は、個性化時代を反映して、大幅な選択制を取り入れるということをしていわれておりながら、実際、現場では、必要であるということで、本校などは2年生あたりでは、文科系も数学は週6時間取る生徒が8割近く居ると思います。逆に理科系は、国語・社会を多く取ることは、少し困難ではないかと思ひます。

全体としては、落ち着いておとなしい生徒が多いということが言われているんですけど、反面、クラブ活動などでやはり、この10年間、積極的に何かをやるという雰囲気——運動部だと一つの目標がはっきりして、練習方法も形式のようなものがあるからいいのですが、文化部、特に教科授業と関連したような、例えば文芸部とか、或いは社会科研究、史学部と称しましょうか、もう既に私も知らないのですが、数学部・物理部、こういった部の中では史学研究部のみしか現在活動していないのです。生徒が集まらないのです。このあたりの部は、活動自体の目標や方法を自分で積極的に見つけないと、部活動にならない分野です。小さい頃からよくつけられておとなしくて素直であるけれども、自ら何かをやるという雰囲気が欠ける傾向が、この4・5年特に目立っているんじゃないかと思ひます。

伝統と芦高生気質

司会 高木先生、芦高の校風は20年代にできたんじゃないかという話をしてみたいんですけど、それを継承している面と、随分変わったなあと感じられる生徒の気質や教師の雰囲気などがございませうか。

高木 そうですねえ。世の中全体が変わってきているということが、一つ根底にあると思うんですけど。

私が、赴任して来た時に、非常に感動したことがございます。例えば、体育の先生の構成一つをとりますと、伊東糾先生から桂廣保先生、森木^{しゆんいち}峻^{しゆんいち}先生、中谷元紀先生、竹内(旧姓乾)浩子先生(芦高をお辞めになったあと、また奈良女子大学大学院の方に進まれて、現在、研究活動をやっておられる方です)というぐあいで、一つの科の中だけ見ても、「すごいなあ!」と思ひました。それは他の教科にも言えます。私自身、感受性の強い、若さのみが前面に出ていた時期であったものですから、「すごいスタッフが居るなあ」と、非常に感心致しました。こういう芦高を支えていらっしゃる先生方が、毎日、有形無形に子供に接している、与えているということで、非常に芦高の生徒は幸せだなということをおもひましたね。

今は、当時の先生の7割ぐらいはお変わりになってしまっていますけれども、どちらかという、生徒が教師の影響を受けるということが少し少なくなってきたんじゃないか。というのは、逆に昔の方がごんたの生徒が居ったと思ひますし、そういう意味では、今の方がちょっと何かの足りないといひますか、反応が無いといひますかね。教師がこう言えば、その通り生徒はやってくれますけれども、私自身、何か少しもの足りないな、というような感じがしています。このことは芦高だけじゃなくて、他の学校でも同じようなことが言えるんじゃないか。一つは、進学に向けての勉強の方の苛酷な状況というものもありませうし、それから、家族の状況も、兄弟が非常に少なくなっている、核家族化してきているということもありませうし、いろんな背景があると思ひますが、何か、芦高生全体としては、おとなしくなってきたのではないかと、ですけども、

芦高の伝統をいまだに受け継いでくれているという所は、やはり、(ちょっと一つの言葉では、なかなか表現できませんが)非常にアダルトな部分がある、芦高生にはあると思います。それは、記念祭などの行事を見てもお分かりのように、(今年から6月に変わったんですけど)よくこれだけ生徒の力でこんな大きな行事をやるなあ、大学レベルの記念祭だと、ある方が今年の記念祭を評しておっしゃったんですけどね。それくらい、本校の生徒は、昔ながらの“先取り”といいますか、“総合性”といいますか、学校の教育の全体像の中にある“総合”というものを、いまだに大切にしているということなど、私、20年間芦高でお世話になっておりますが、いまだに変わらないものがあるなあと思います。

芦屋高校の将来像

——現在のそして将来の芦高生に望むこと

司会 今日、朝の10時から、ほんとうに長時間にわたって、たいへん貴重な、また、年史には今まで出てきていなかったような裏話も多く聞かせて頂き、ほんとうにありがとうございました。

では最後に、現在と将来の芦高生に望むことを、一言ずつ、お言葉を載せて終わりたいと思います。金坂先生、どうぞ。

金坂 やっぱり、個性のある生徒であってほしい。今どうですか、入学して途中退学する生徒は、どれくらいおりますか？ 高校生の中途退学が、非常に問題になっておりますが。

小西 たまたま県の統計の要求がありまして、昨年度の本校の退学者は10名です。そのうち、3名ばかりがいわゆる海外留学でそのまま退学して、7名が、進路変更というよりも登行拒否的な要素で、長欠の結果で退学しました。

金坂 それなら、非常に成績は良いと思いますね。生徒に、自分の目標を持たせてほしいと思うんです。

受験の姿勢を見ましても、以前でしたら、例えば、自分は公立を受ける、或いは、経済を専門にやると。経済をやるとしたら、関学の経済、関大の経済、大経の経済と、こういうふうに分けたんですね。今の生徒は、関学を受けると決めると経済から文学部までみな受けるんです。一体どれが本命だ、と聞いて

も、いや、関学に行きたいんですけど、何をやるという一つの目標をはっきり持たない。だから、自分はこれを一生やるんだ、というような、目標を持たせるような教育をしていただいて、やはり、個性のある生徒を作っていくことが大事じゃないか、と思うんですけどね。

私はよく生徒に言っていたんですが、「とにかく自分の一番好きな道に行け」と。「そしたら、一生後悔しない」と。僕なんか、親父の反対押し切って国文科をやったんだけど、国語をやって、国語の教師になって、仕事がいやだと思ったことは一度もないなあ。とにかく、好きなもの、文学なら文学、経済なら経済と、目標を決めた生徒になってほしい。また、そういう指導をしてほしいという気がするんです。

司会 どうも、ありがとうございました。曾谷先生いかがでしょうか。

曾谷 芦屋高校の持ち味、特性というものは、もう既に20年代から今日までずっと続いてきているようですが、その点は大事にさせていただきまして、一方、そのマイナス面が出ているようですね。そのあたりをどのようにカバーするか、ということが、問題ではないかと思われまして。それには先ず心の世界をひろげ、豊かな気持ちをもって、自分で物を考える基盤と習慣を養ってゆくことが大切のように思います。

クラブ活動も、皆さん、熱心になさっているようですが、これも例えば、芦屋高校の生徒さんでマラソンをやっている方が、毎日汗をかいて一生懸命走るんだそうですね。ところが、走りながら、「何を目的で走ってるんだらうなあ。空しいなあ」と言ったというのを間接的に聞きましてね。クラブ活動をやりながら、そのような気持ちでやっている生徒もあるかも知れませんね。ですから、先生がおっしゃったように、楽しく何でもできるような雰囲気作りができないものかなあ。

それから、この頃の人は、心配りや思いやりというのがありませんね。そういうところが、学校の汚いところにも出てきてるとちがいますかしら。こうしたあたりを強制でなくて、どういうふうな指導